

平成25年 酒田出身の人物 展示人物一覧

展示期間：平成25年1月4日～12月28日（2階常設展示室）

もり とうえもん
森 藤右衛門（民権運動家）天保13年（1842）～明治18年（1885）



鶴岡市郷土資料館提供

酒田本町で酒醤油醸造業を営む唐仁屋の二男として生まれる。

7歳のころ池田家の養子になるが、生家の跡を継ぐため戻る。慶応4年（1868）、戊辰戦争に参加。学才があり、明治2年には、酒田で最初の公立学校「学而館」の句読師に選ばれる。

同年、飽海郡の農民が雑税の免除などを求める「天狗騒動」が起こり、いったんは鎮圧されるが、明治六年に川南を中心にした「ワッパ騒動」が再発する。森は、翌7年から指導者的な立場で騒動に加わり、建白運動、過納金返還訴訟運動を行う。合法的に農民側を一部勝利に導いた。

ワッパ騒動後、本格的に自由民権運動を展開し、明治13年に河野広中、片岡健吉らとともに、国会開設請願書を提出。庄内で初めての政治結社「尽性社」を創立する。同14年、庄内の新聞の先駆けといわれる「両羽新報」を発刊した。この年、酒田戸長に推され、同17年には県会議員に選ばれたが、在職中に山形で病死した。

やまぐち はんぼう
山口 半峯（書家）明治2年（1869）～昭和14年（1939）



筑後町に生まれる。

幼いころから書を得意とし注目された。18歳ごろ、学力を認められ琢成学校に奉職。明治22年、酒田に来遊した書家・西尾鹿峰に師事する。同26年、文部省検定試験中等学校習字科の免許を得て、長く酒田高等女学校に勤務。その傍ら、書道の大家・長三洲に師事する。同31年には東北臨池会を設立し、自宅に書道塾を開いた。

明治43年、上京して会計検査院に勤務。翌年、大日本臨池会を創立し（間もなく大日本書道研究会に改称）、旧華族家の書道御用を務めた。

大正3年（1914）、宮内省に入り貴重文書の浄書にあたる。同9年、小学校国定教科書習字手本の執筆を囑託される。同年に東京商科大学講師となる。以来、執筆した中等学校習字教科書は十数種に及んだ。昭和6年には文部省習字科検定試験委員に推されている。

さとう りょうじ
佐藤 良次 (文筆家)

明治4年(1871)～昭和5年(1930)



鶴岡に生まれる。

幼いころに、父母とともに酒田に移住。琢成学校で学び、裁判所の給仕の仕事をしてながら勉学に励む。明治24年、酒田を訪れた政治家、板垣退助と河野広中の講演会で述べた開会の辞が認められ、秋田まで同行する。

同年、東京専門学校(早稲田大学の前身)政治科に入学。上田秋成の事跡を調査し、その代表作『雨月物語』の活字本を初めて出版するなどして、秋成の名を高めた。

帰郷後は、酒田新聞の主筆となり、政治、文芸、郷土史の評論で活躍する。交際の範囲が広く、犬養木堂をはじめ、多くの文人墨客を酒田に招いた。大正10年(1921)には竹久夢二の画会を開いた。自分でも絵を描き、「蟹の図」を最も得意とした。俳句では「古夢」の俳号で華鈴会を興し、高浜虚子と交わる。

町会議員として酒田町政にも尽力した。

いけだ やすみつ
池田 靖光 (刀匠)

明治12年(1879)～昭和16年(1941)



飽海郡観音寺村(旧八幡町)に生まれる。

家は、代々「伝兵衛鍛冶」の屋号で、刀剣から刃物一切を手掛ける鍛冶屋を営み、靖光はその10代目である。

子供のころから鍛冶の作業を見て育つ。父の跡を継いで「一光」と称して刀工の修業に励み、全国に名前が知られるようになった。

昭和8年、軍刀の製造を主目的とした財団法人日本刀鍛錬会が靖国神社境内に創設され、全国の刀鍛冶四百数十名に試作刀の提出を求める。審査の結果、備前の梶山刀匠(後に靖徳)、江戸の宮口刀匠(後に靖広)とともに、わずか3名の合格者に選ばれる。刀匠として東京に招かれ、刀工を指導した。荒木貞夫陸軍大臣より「靖光」の号を贈られ、水心子派の刀剣鍛錬に腕を磨く。

旧八幡町常禅寺の薬師神社の御神剣、酒田市本楯の大物忌神社の御神刀を製作している。日本刀大共進会、日本刀展覧会にも多数出品した。

くむら せい太 (実業家・化学者) 明治13年(1880)～昭和26年(1951)



今町に生まれる。

明治31年、荘内中学を卒業。旧制二高を経て、東京帝国大学理科大学に進み、応用化学科を中退。在学中から学校には行かずに、太陽レザー製造所のレザー研究室で研究に没頭する。その手腕が認められ同38年、創立したばかりの東レザーの技師長に迎えられ、人絹(レーヨン)製造の研究に打ち込んだ。

翌年、東レザーは東工業と改称。大正4年(1915)に設立した東工業の分工場・米沢人造絹糸製造所で、大学の同窓である秦逸三とともに、研究に取り組む。

大正7年、同製造所が帝国人造絹糸(現在の帝人)として独立。その取締役になる。昭和9年に社長、同13年からは国際パルプ工業の社長も兼ねる。戦後は、帝人会長、日本化学繊維協会会長を務める。たびたび洋行し、人絹の製造法について視察した。

昭和3年には化学者としての業績が認められ、藍綬褒章を受章した。

あべ じろう (哲学者) 明治16年(1883)～昭和34年(1959)



松山文化伝承館提供

飽海郡上郷村(旧松山町)に生まれる。

村の青年たちに「論語」を講義する父、話術に巧みで宗教心にあつい祖母、村の人々の温かい人情に触れ、内省的で多感な性格に育つ。

荘内中学1年の時に、生涯の進路として教育者を選び、そのために修める学問として哲学を志した。山形中学を経て、旧制第一高等学校に入学。齋藤茂吉らと出会い、校友会雑誌などに積極的に文章を発表する。東京帝国大学に進学し『帝国文学』の発行に参画した。

明治42年に夏目漱石の門下生となり、『朝日文芸』などに文芸・哲学評論を数多く書く。大正3年(1914)に感想評論集『三太郎の日記』を発表。同六年には雑誌『思潮』を主宰し、新カント哲学者の立場から人格主義を唱えた。

大正11年、文部省海外研究員として渡欧。帰国後は東北帝国大学の美学担当教授となり、仙台に移住。亡くなるまで、この地で研究に専念した。仙台市名誉市民第一号の称号を受けている。

こまつばら きゅうじ
小松原 久治 (貴金属精製研究・工学博士)



明治25年(1892)～昭和42年(1967)

飽海郡南平田村桜林(旧平田町)に生まれる。

荘内中学から、名古屋の第旧制八高等学校、京都帝国大学工科大学に進学。卒業後、大蔵省造幣局に勤務する。

造幣局作業部試金場長を務めていた昭和6年、京都帝国大学に主要論文として「金銀の電気分解について」、参考論文として「電解銀結晶の原子配列について」を提出。工学博士の学位を取得する。飽海地方初の工学博士といわれている。

小松原の研究の結果、造幣局では金銀の品位を従来よりも高め、作業時間や労力を以前の3分の1ほどに減らすことができた。ほかにも金銀の電解精製などに関する画期的な研究に取り組み、造幣局における貴金属精製業務の発展に多大な功績を残した。

造幣局研究所長などを経て、昭和24年に退職した。

兄弟とも優秀で、兄の重治は、東京帝国大学卒業後、医学博士になり、酒田本町に白崎医院を開業した。

はら こ
原 のぶ子 (ファッションデザイナー) 明治34年(1901)～平成9年(1997)



松嶺町南町(旧松山町)に生まれる。

尋常小学校の教諭をしていたが、向学心と職業婦人へのあこがれから、共立女子職業学校(現在の共立女子大学)へ進学。卒業後は母校で教鞭をとる。

昭和9年(1934)、文部省の依頼を受けて渡仏し、服飾デザインを学ぶ。パリにアトリエを持ち、その後の基盤となる洋裁知識を深めた。帰国後、日本で初めて、「フランス式立体裁断法」や「フランス式洋裁教育」を導入した。

昭和17年に「原のぶ子アカデミー洋裁」(現在は青山ファッションカレッジ)を設立。同29年には、デザイナーの団体「サロン・デ・モード」を創立し、日本初のファッションショーを開催するなど、人材育成に尽力した。米沢女子短期大学の名誉教授なども務めた。

昭和51年、勲五等瑞宝章を受章。同62年に松山町名誉町民第一号となった(現在は酒田市名誉市民)。